

昔むかし娘子をとめあり、字あざなを桜さくら児こといふ。二ふたりに二ふたりのせとこ壮士をとこあり、共ともにこの娘をとめを誂とちりひて、生いのちを捐すてて拮あらそ競せひ、死しを貪むさぼりて相あひあ敵たる。ここにに娘子をとめ歎なげ歎なげきて曰いはく、「古いにしへより今いままでに、未いまだ聞きかず未いまだ見みず、一ひとりの女をみなの身みの二ふたつの門かどに往ゆ適ゆくといふことを。方いまし今こころ壮士をとこの意こころ、和やは平かたし難かたきことあり。如しかじ、妻わが死しにて相あひこ害ころすこと永ながく息やまむには」といふ。すなはち林はやしの中なかに尋たづね入いり、樹きに懸さがして経わなき死しぬ。その両ふたりの壮士をとこ、哀かな慟しびに敢あへず、血ちの涙なみだ襟ころものくびに連ながる。各おのおの心おもひ緒おもひを陳のべて作つくる歌うた

二首

三七八六番

春はるさらば かざしにせむと 我あが思おもひし 桜さくらの花はなは 散ちり行ゆけるかも

三七八七番

妹いもが名なに かけたる桜さくら 花はな咲さかば 常つねにや恋こひむ む いや年としのはに